

その二. あらい祭り

子どもたちが神主に大根を投げつける——。そんな不謹慎ともいえる祭りが、山田・一本松地区の鎮守・大宮神社で続けられています。大根を投げることから「大根祭り」とも呼ばれているこの祭りは、全国的にも珍しく、「奇祭」と呼ばれています。

今月号の広報は「あらい祭り」と芝山町各地で行われている「オビシャ」の2本立てでお届けします。



①子どもたちは力いっぱい大根を投げつける
②火が付けられたやぐら
③今年は4人の子が大根を投げた
④ごちそうを食べると自然と笑顔に
⑤祭りで出される食事
⑥獅子舞を舞うのは「シタド(来年の当番)」の役目
⑦大根投げの前に厳かに行われる当番の引き継ぎ

あらい祭りの由来

江戸時代末期、中村檀林(現在の多古町日本寺)へ修行に来ていた僧が、山田村の農家に一夜の宿を頼みました。家の主人は喜んで僧を泊めてもてなし、村の子どもたちが健康に育たないこと、村に災難が多いことを話しました。僧は「神社に参拝して祭礼を行えばよい」と教えました。そこで主人は皆と相談し、嘉永3(1850)年から祭礼を始めました。すると子どもは元気に育つようになり、村を襲う災難もなくなつて繁栄するようになった、と伝えられています。

5年に1度の大役

祭礼前日の12月13日、この年の当番である一本松組の人々が集会所に集まり祭礼の準備をします。以前は当番組の中から選ばれた当番の家「ヤド」で祭礼を行っていたため、経済力があり家も大きくなければヤドを受けることはできなかったそうです。

男性は、集会所の前のほりを立てます。「当番が回ってくるのは5年に1度。分らないことだらけです」と鈴木邦男さんは準備の手を止めて話してくれました。女性は祭礼当日の食事の仕込みを行います。「当日は大勢の人が食

しばらくすると、ごさを盾にして神主一行が神社へ向かってやってきます。子どもたちは待つてましたとばかりに、大根を力いっぱい投げつけます。大根を投げる意味はよく分からないということですが、一説には、この地で起きた合戦を後世に伝え、地域の安泰を祈るためといわれています。「奇祭」を一目見ようと集まったカメラマンたちも、子どもたちが大根を投げるたびにシャッターを切ります。神主一行は大根の集中砲火を防ぎつつ、脇道から神社へ入ります。すると、境内に建てられた「やぐら」に火が付けられます。やぐらの材料の竹が燃えてはじける音がとどろく中、神社本殿では神主の祝詞の声が響き、祭りは終盤を迎えます。

今年のあらい祭りでの大根投げが最後という小川真慧くん(中3)は語ります。「小学校1年生の時から参加しています。これからは大人として祭りを運営する側になると思いますが、この伝統ある祭りを続けていきたいと思っています。」

あらい祭りは大根を投げる子ども、それを防ぐ神主や役員、ごちそうを食べにくる地区の人々、皆が楽しげに参加しています。祭りは子どもやムラを災いから守り、参加する人々が笑顔で喜ぶ「喜祭」ともいえるのかもしれない。

べにくるから、20人分程度仕込みます」と、忙しそうに準備をしています。

ごちそうと獅子舞

14日の祭礼当日、集会所では、男性陣は座敷の用意、女性陣は料理の準備に余念がありません。午前11時を過ぎると、地区の人たちがごちそうを食べにやってきます。出される料理は、白和えや煮物など、昔から引き継がれてきた献立です。そこへ突然獅子舞が座敷に乱入。ヒモトキと十五祝いの子どもの頭を噛んで厄落としをします。「以前はお囃子が伝わっていましたが、途絶えてしまいました。20年位前に復活させようとしたのですが、うまくいきませんでした」と小川宏治さんが説明してくれました。おいしい料理と獅子舞で話も盛り上がり、座敷にいる皆の顔から笑顔がこぼれます。

子どもたちによる「大根投げ」

食事が終わると、いよいよ大根投げの時間。神主や役員は一本松集会所から山田集会所へ向かいます。子どもたちは神社手前の道に陣取り、大根を手にして準備万端。大根を投げるのは小学1年生から中学3年生までで、この日ばかりは山田地区の子どもたちは学校を早退できるそうです。



ヤドの当主
岩内 直さん

協力に感謝

祭りについては何も分からなかったのですが、祭りが終わりホッとしています。地区の皆さんの協力がなければ大役を無事に果たすことができなかったのです。とても感謝しています。小さい地区なので、皆で助け合わないと祭りは続けられないですね。地区全体で取り組んだので、より団結できたと感じます。

祭りの将来に不安

昔の祭りは子どもが多くて、30人位はいたんじゃないかな。中学3年生が親方になって指示していました。今では七五三や十五祝いをやる子どももいないし、この先祭りが続けられないんじゃないかと心配しています。



総代
木内 平さん